

朝食の片付けが終わると、利用者様と一緒に朝のラジオ体操、その後利用者様の体調に応じた水分補給、また男性は髭剃り、手足の爪のケア、顔ふきなど快適に一日を過ごしていただけるよう、できる限りのお手伝いを行い一日が始まります。



始業にあたり、職員の朝のミーティングがあります。夜勤者担当職員からは、利用者様の様子が報告され、体調がすぐれない利用者様には医務と協議の上、適切な対応、またその日の通院など行事の予定を職員全員で共有します。



情報交換、共有が一番大切なことです。
利用者様の状態を把握して、常に適切な対応を協議しています。

大空にはツバメが舞い、初夏のさわやかな風が吹き抜ける今日この頃です。
今回は双葉苑の一日の始まりを紹介してみました。
一日のスタートをご覧ください。

ある日の一日

ふたばよもやま話（第二十七回）

～小倉城と三階菱～

小倉と言えば、真っ先に頭に浮かぶのが小倉城ではないでしょうか。

関ヶ原の合戦の後、徳川幕府が開かれ細川忠興が豊前の太守として入国されます。細川氏はのちに熊本の家主となり、のちに小笠原氏が豊前の家主として入国、小笠原氏の治世は明治維新前まで続きます。

小笠原氏の家紋は菱形を三つ重ねた三階菱といい、シンプル中にも安定感のある優れたデザインです。

小笠原氏の歴史を書いた『小笠原系譜』によれば、後醍醐天皇から「王」の字の家紋を賜ったが、畏れ多いとのことから今の文様になったとも書かれています。

旧豊前国内の由緒ある社寺や神輿に三階菱も見られ、旧大名家の家紋が現代まで息づいている事は、全国的にも珍しく小笠原家が領民に慕われていた証と言えるでしょう。ちなみに小倉城の新年鏡餅は三階菱に因み、三段重ねとなっています。



小倉城と小笠原家家紋である三階菱

職員紹介コーナー

今回は、今年4月1日より新社会人として双葉苑の介護職員となった山内望々さんの紹介です。

山内さんは昨年春、夏に双葉苑の介護施設実習で介護の技術や心得を学び、「私も双葉苑の職員さんのように、利用者様に寄り添った介護をさせていただき、利用者様には家族のような気持ちで接し、安心と安らぎを感じてほしい」と思い、この世界に進みたいと決心したそうです。

介護の仕事は大変ですが、献身的に利用者様と接する先輩方を見て、心と体のケアが素晴らしいと、やりがいのある仕事ということを実感したそうです。

山内さんにいまの気持ちを聞くと、少しでも早く仕事を覚えて、利用者様はもちろん、先輩職員の支えとなれるように頑張っていきたいということでした。

さらに、利用者様には双葉苑に入所してよかったと思っていけるように、はやく一人前の介護士になっていきたいということでした。無限の可能性を秘めた若い山内さんに対する期待は関係者一同ともに大きく、期待の新人として頑張ってほしいものです。



笑顔が素敵な山内さん。
入所者様のために頑張ってください。

今月の予定（5月）

ますゆき皮膚科回診

1日(木)

小倉北歯科回診（毎木曜日）

1日、8日、15日、22日、29日

石橋医院回診（毎月曜日）

12日、19日、26日

ビューティヘルパー

13日(火)

防火避難訓練（日中想定）

21日(水)

生花

28日(水)

【編集雑記】▼戦国時代までは防衛の拠点として機能していた城も、徳川家康が天下統一して幕府が開かれ、平和な時代が訪れると城の持つ意味も変わってくる▼戦国のような血なまぐさい戦いはなくなり、防衛に有利な山間部に築かれていた城も、平野に造られ城主はそこに住み、家臣団は城の周りに居住、同時に城を取り囲むように商業地も発達し、城下町が形成されていった▼まさに城はその国の政治経済の中心地で、現在流に表現すれば県庁といったところであろうか。徳川幕府は築城にあたって城の大きさなど厳しく制限したと言われているが、小倉城は石高の割には大きな城であった▼薩摩藩や佐賀藩、久留米藩や柳川藩、さらには黒田藩など有力大名が多い九州の喉元を抑える意味で、元々徳川家の家臣であった小笠原家を小倉に配置し、九州や西国の外様大名に睨みを利かせた▼お隣の黒田藩五十五万石に比べると小倉藩十五万石は随分少ないように見えるが、殿様の権威は高く、しかしそれは今という交際費や格式を保つための費用も莫大にかかり、台所事情は決してよくなかった▼城は領民からの搾取によりつくられたもので、権力の象徴という見方もあるが、決してそれだけではないだろう。領民にとつて城はお国自慢の一つで、「おらが国のお城はこんなに立派なのだぞ」という記述も残っているし、一揆のとき代官所が襲われたことはあるものの、城が天草の乱で福岡城が襲われた事以降、全国でもあまり例がない▼よもやま話に書いているように、殿様の家紋である三階菱は小倉祇園太鼓はもとより、旧豊前国内の祭りや神輿、社寺などいたるところで目にする事ができる。旧藩主の家紋がこれほど現在まで身近に盛られることは全国でも珍しい▼日本陸軍の父と言われる山縣有朋は幕末、小倉藩と戦い明治になつて自叙伝の中で小倉藩の幕府に対する最後まで忠誠をほめたたえている。